

火の唇

原民喜

青空文庫

いぶきが彼のなかを突抜けて行つた。一つの物語は終ろうとしていた。世界は彼にとつてまだ終ろうとしていなかつた。すべてが終るところからすべては新しく始る、すべてが終るところからすべては新しく……と繰返しながら彼はいつもの時刻にいつもの路を歩いていた。女はもういなかつた、手袋を外して彼のために別れの握手をとりかわした女は。……あの掌の感触は熱かつたのだろうか冷やりとしていたのだろうか……彼はオーバーのポケットに突込んでいる両手を内側に握り締めてみた。が何ものも把えることは出来なかつた。影のような女だつたのだが、彼もまた女にとって影のような男にすぎなかつたのだ。影と影はひっそりとした足どりで濠端に添う舗道を歩いていた。そして、最後にたつた一度、別れの握手をとりかわした、たつたそれだけの交渉にすぎなかつた、淋しい淋しい物語だつた。

いぶきが彼のなかを突抜けて行く。淋しい淋しい物語の後を追うように、彼は濠端に添う舗道を歩いて行く。枯れた柳の木の柔かな影や、傍にある静かな水の姿が彼をうつとりと涙ぐまそうとする。すべてが終るところから、すべては新しく……彼はくるりと靴の踵をかえして、胸を張り眼を見ひらく。と、風景も彼にむかつて、胸を張り眼を見ひらいて

くる。決然と分岐する舗装道路や高層ビルの一聯が、その上に展がる茜色の水々しい空が、突然、彼に壮烈な世界を投げかける。世界はまだ終ってはいないのだ。世界はあの時もまた新しく始ろうとしていた。あの時……原子爆弾で破滅した、あの街は、銀色に燦る破片と赤く爛れた死体で酸鼻を極めていた。傾いた夏の陽ざしで空は夢のように茫と明るかった。橋梁は崩れ墮ちず不思議と川の上に残されていた。その橋の上を生存者の群がぞろぞろと通過した。その橋の上で颯爽と風に頭髮を翻しながら自転車であつて来る若い健康そうな女を視た。それは悲惨に抵抗しようとする生存者の奇妙なりズムを含んでいた。だが、その瞬間から、彼の脳裏に何か焦点ははつきりとしなが、広漠たる空間を横切る新しい女の幻影が閃いた。

イヴ

ニユー・イヴ

イヴは今も彼が見上げる空の一角を横切つてゆくようだ。茜色の水々しい空には微かに横雲が浮んでいて、それは広島の惨劇の跡の、あの日の空と似てくる。いぶきが彼のなかを突抜けてゆく。

彼がその女と知遇しりあつたのは、ある会合の席上であつた。火の気のないビルの一室は煙で濛も々もと悲しそうだつた。女は赤いマフラをしていた。その眼はビルの窓ガラスのように冷たかつた。二度目に遇つたのも、やはりその佻わびしいビルの一室であつた。会合が終つたとき女がはじめて彼に口をきいた。それから駅まで一緒に歩いた。

「わたしと交際つきあつてみて下さい。またいつかお会い致しましょう」

みて下さい……という言葉が彼の意識に絡からまつた。が、彼はさり気なく冷やかに肯うなずいた。冷やかに……だが、その頃、彼は身を置ける一つの部屋さえ持てず、転々と他人の部屋に割込んで暮くらしていた。そんな部屋の片隅かたすみでノートに書いていた。

へ踏みはずすべき階段もなく、足は宙に浮いている。もしかすると彼は墜落しているのだろうか。だが、彼の眼は真さかさまに上を向いていて、墜落してゆく体と反対に、ぐんぐん上の方へ釣上げられてゆく。絶叫もきこえない。歓声も湧わかない、すべては宙に浮んだまま。(無限階段) 〽

女は彼と反対側の電車で帰つた。淋しそうな女だが、とにかくああして帰って行く場所はあるのかと、何となしに彼は吻ほっとした。人間が地上にはつきりした巢ねをもっていること(それは妻が生きていた頃なら別に不思議でもなかつたが)今では彼にとって殆ほとんど驚異に

近かった。あの時……彼の頭上に真暗なものが崩れ落ちるとその時から、彼には空間が殆ど絶え間なく波のように揺れ迫った。その時から、彼は地上の巢を喪い、空間はひっきりなしに揺れ返つたのだ。……火焰のなかを突切つて、河原まで逃げて来ると、そこには異形ぎようの裸体の重傷者がずらりと並んでいる。彼はそのなかから変りはてた少女を見つめる。それは兄の家の女中なのだ。彼はその時から、苦しがる少女に附添つて面倒をみる。ふくふくに腫れ上つた四肢を支えてやると、少女の軀からだとも思えぬほど無気味だが、水を欲しがくちびるえいじる唇は嬰兒のように哀れだ。やがて、二晩の野宿の挙句、彼は傷いた兄の家族と一緒に寒村の農家に避難する。だが、この少女だけは家に收容しきれず村の收容所に移される。ある日、彼はその女中のために蒲団ふとんを持って收容所を訪れる。板の間の筵むしろの上にごろごろしている重傷者のなかに黒く腫れ上つた少女の顔がある。その眼が、彼の姿を認めると、眼だけが少女らしくパツと甦よみがえる。

「連れて帰つて下さい、連れて帰つて、みんなのところへ」

その眼は、眼だけで彼にとり縋すがろうとしていた。

「それはそうしてあげたいのだが……」

彼はかすかに泣くように呟くと、持つて来た蒲団をおくと、まるで逃げるようにして立

去る。その後、少女は死亡したのだ。だが、あの悲しげな少女の眼つきはいつまでも彼のなかに突立っていた。

わたしと交際つてみて下さいと約束して、反対の方向に駅で別れた女の眼つきを彼は思ひ出そうとしていた。その眼は祈りを含んだ眼だろうか、彼のなかに突立ってくるだろうか、……何か揺れ返る空間の波間にみた幻のようにおもえた。

轟音もろとも船は転覆する。巨濤が人間を攫い閃光が闇を截切る。あたり一めん人間の叫喚……。叫ぶように波を掻き分け、喚くように波に押されながら、恐しい渦のなかに彼はいる。しづきが頬桁を撲り、水が手足を振ぎとろうとする、刻々に苦しくなつてゆく波に、ふと灰明りに漾っているボートが映る。と、その方向へひたすら、そこへ、一インチ、一インチとすべてが蠕動してゆく。が、漸く近づいたボートは既に遭難者で一杯なのだ。彼は無我夢中でボートの端に手を掛ける。と、忽ち頭上で鋭い怒声がある。

「離せ！ この野郎！」

だが、彼は必死で船の方へ匍い上ろうとする。

「こん畜生！ その手をぶった切るぞ！」

いま相手はほんとに鉈を振上げて彼の手を覗っているのだ。彼は縋りつくように、その

男の眼を波間から見上げる。眼だけで、縋りつくように、波間から……波間から……波間から……。

宿なしの彼は同室者に対する気兼ねから、饑^{ひも}しい体を鞭^{むち}打ちながら、いつも用ありげに巷^{ちまた}の雑沓^{ざつとつ}のなかを歩いてきた。金はなく、彼の関係している雑誌も久しく休刊したままだった。知人のKが所有するビルの一室が、もしかすると貸してもらえるかもしれないという微かな望みがあったが、いつも波間に漾^よっているような気持で雑沓のなかを歩いていた。……彼の歩いてゆく前面から冬の斜陽がたつぷり降り灑^{そそ}ぎ、人通りは密^{ひそ}になっていた。省線駅の広場の方まで来ていたのだ。その時、恰^{ちようど}度電車から吐き出された群衆が、改札口から広場へ散^{かた}つて行くのだった。彼は何気なく一塊^{かたま}りの動く群に眼を振向けてみた。と、何か動く群のなかにピカツと一直線に閃^{ひらめ}くものがあつた。赤いマフラをした女の眼だ。……あの女かもしれないと思つた瞬間、彼はもう視線を他^そへ外^そらしていた。が、ものの三十秒とたたないうちに、彼は後から呼び留められていた。

「平井さん……かしらと思ひました」

女はそう云つたまま笑おうとしなかつた。彼も無表情に立っていた。

「今日はこれから訪^{たず}ねて行くところがあるので失礼致しますが、またそのうちにお逢いで

きるでしょう」

ふと女は忙しそうに立去って行つた。彼も呼び留めようとはしなかった。

そのビルの一室が開けてもらえるかどうかはつきりしなかったが、彼の全財産を積んで一台のリヤカーはもうその建物の前に停とまつていた。彼は運送屋と一緒にそのビルの扉を押して、事務室らしい奥の方へ声をかけた。濛もつ々もつと煙るその煙のなかに人間の顔がぐらぐら揺いだ。彼の前に出て来た小柄の老人は冷然と彼を見下して云つた。

「部屋なんか開ける約束になつていない」

彼はドキリとした。とにかくKに逢つてみれば解わかることだが、荷物だけでもここへ置かしてもらわねば、差当つて他へ持つて行ける所もなかった。

「それなら土間のところへ勝手に置きなさい」

夜具と行李こつりとトランクが土間に放り出されると、彼はとにかく往来へ出て行つた。忽たちまち揺れ返る空間が大きくなつていた。鉞なたを振るつて彼の手首を断ち切ろうとするのが、先刻の老人のおもえたりする。ふらふら歩いて行くうち、ふと彼は知人のKが弁護士らしい男と連れだつているのに出喰でくわした。Kはその所有しているビルを他に貸していたが、

その半分を自分の側に開け渡さすため前々から交渉に交渉を重ねていた。約束の日は今日だった。日が暮れかかる頃、漸く二階の一室が譲渡された。その時から、彼はその二階の一室を貸してもらったのだが。……揺れ返るものは絶えずその部屋を包围していた。襖と廊下を隔てて向側にある事務所は電話の叫喚と足音に入り乱れ、人間が人間を捻じ伏せたり、人間が人間を撫でまくる、さまざまのアクセントを放つ。男も女もそれは一塊りの声であり、バラバラの音響なのだ。彼と何のかかわりもない、それらの一群が夕方退去すると、今度は灯の消えた廊下を鼠の一群が跳梁する。それから、彼が外食に出掛けたり、近所にある雑誌社に立寄ると、街が、活字が、音楽が、何かが何かを煽り、何かが何かと交錯して来た。

そのビルの一室に移ってから、彼はあの淋しげな女とよく出逢うようになっていた。女の勤先があまり遠くない所にあるのも彼には分った。電車通りから少し外れると、人通りの少い静かな道路がある。時々、そんな路を女はふらりと歩いていることがあった。路でばったりと彼と出逢うと、女はすぐ人懐そうに彼に従って歩いた。

「お忙しいでしょう、失礼します」

女は曲角ですらりと離れる。それからお辞儀をして、小刻に歩いて行く。忙しそうなも

のに掻き立てられてゆく後姿だけが彼の眼に残った。何度、行逢っても、あつけない遭遇にすぎなかったが、女は人混みのなかでも彼の姿をすぐ見わけた。女が雑沓のなかに消え去ると、……揺れ返る空間の波が忽ち大きくなる。ああして、女がこの世に一人存在していること、それは一たい何なのだ？　そして今ここで何なのだと僕が思考していること、それは一たい僕にとって何なのだ？　と急にパセチックな波が昂まって、この世に苦しむものの、最後の最後の一歩最後のものの姿がパツと閃光を放つ。

……火の唇　　火の唇

ふと彼はその頃、書きたいと思つている一つの小説の囁きをきいたようにおもつた。

.....

燃え狂う真紅の焰が鎮まつたかとおもうと、やがて、あの冷たい透き徹つた不思議な焰がやつて来た。飢餓の焰だ。兄の一家族や寡婦の妹と一緒に農家に避難した僕は、それから後、絶えずこのしぶとい悲しい焰に包围されていた。それは台所の汚れかえつた畳の上でも、煤けた穴だらけの障子の蔭でもめらめらと燃えた。それから青田の上でも、向うに見える山の上でもめらめらと透き徹る焰はゆらいだ。空間が小刻みに顫えて、頭の芯が茫として来る。このような時——人間は何を考えるのか——このような時、人間は人間の……

…人間の白い牙きばがさつと現れた。妹と嫂あによめは絶えず何ごとか云つて争つていた。

「口惜くやしくて、口惜くやしくて、あの嫁を喰くいちぎつてやりたい」

飢えてはいない隣家の農婦が庭さきで齒はぎりしりしていた。その言葉は、しかし、ぴしりと僕を打った。喰くいちぎつてやりたい……人間が人間を喰くいちぎる……一瞬にして変貌へんぼうする女の顔がパツと僕のなかで破裂したようだった。

悲しげな無数の焰に包囲されて、僕が身動きもできないでいる時、しかし、人々は軽ろやかに動いていた。爆心地で罹災りさいして毛髪けがすっかり脱けた親戚しんせきの男は、田舎いなかの奥で奇蹟せき的に健康をとり戻し、惨劇の年がまだ明けないうちに、田舎から新しい細君めとを娶った。無数の変り果てた顔の渦巻いていた廃墟はいきよを、無数の生存者が歩き廻った。廃墟の泥濘ぬじりの上の闇市やみいちは祭日まつひのようであった。人々はよろめきながら祭日まつひをとり戻したのだろうか。僕もよろめきながら見て歩いた。今にもぶつ倒れそうな瘦やせ男おとこがひらひらと紙幣せんぺいを屋台に差出し、手で把つかんだものをもう口に入れていた。めらめらとゆらぐ焰いたは到いたる処ところにあった。復員者ふくえいしやはそこに戻つて来て、崩壊した駅は雑沓にぎして賑にぎわった。その妻子せきしを閃光せんこうで攫さらわれた男は晴着はるぎを飾る新妻にいづまを伴ともつて歩いてきた。速すみやかに、軽ろやかに、何気なく、そこそこに新しい巢ねが営いまれた。

「もう決して何も信じません。自分自身も……」

罹災を免れ家も壊こわされなかつた中年女は誇らかに嘯うそがくのだが。……

寡婦の妹は絶えず飢餓からの脱出を企てていた。リュックを背負う面おも襖やつれした顔は、若々しい力を潜め、それが生きてゆくための最後の抗議、堕ちて来る火の粉を払おうとする表情となっていた。だがどうかすると、それは血まみれの亡者の面影に見入って、キャツと叫ぶ最後の眼の色になっている。悶もだえ苦しむ眼つきで、この妹が僕に同情してくれると僕はぞつとした。たしかにその眼は、もうあの白骨の姿を僕のうちに予想する眼だった。

だが、その年が明けると、その妹にも急に再縁の話が持ち上っていた。その話をはじめてきた日、僕は村の入口の橋のところ、リュックを背負ってやって来る妹とばったり出逢った。立話をしているうちに僕はふと涙が滲にじんで来た。(涙が？ それは後で考えてみると、人間一人飢死を免れたのを悦よろこぶ涙らしかった。)だが、その僕はまだ助かつてはいなかった。焔は迫って来た。滅茶苦茶にあがき廻った拳句、僕は東京の友人のところへ逃げ込んだ。

だが、僕を迎えてくれた友人の家も忽ち不思議な焔に包围された。飢餓の火はじりじりと燻くすんで、人間の白い牙はさつと現れた。一瞬にして、人間の顔は変貌する。人間は一瞬

の閃光せんこうで変貌する。長い長い不幸が人間を変貌させたところで、何の不思議や嘆きがあるろう。——日夜、その家の細君のいかつい顔つきに脅えながら僕はひとり心に嘯なげいていた。

紅の衣服に育てられし者も今は塵堆じんたいを抱く……乞食こじきのような足どりで、僕は雑沓ざつさくのなかや、焼跡の路を歩いた。焼跡の塵堆に僕の眼はくらくらし、ひだるい膝ひざは前につんのめりそうだった。と頭上にある青空が、さつと透き徹とほつて光を放つ。(この心の疼うずき、この幻想こうそうのくるめき)僕は眼も眩くらむばかりの美しい世界に視入みいろうとした。

それから、僕を置いてくれていたその家の主人は、ある日旅に出かけると、それきり帰って来なかつた。暫くして、その友人は旅先で愛人を得ていて、もう東京へは戻って来ないことが判わかつた。それから僕はその家を立退たちのかねばならなかつた。それから僕は宿なしの身になつていたのであるが、それから……。苦惱が苦惱を追って行く。——つみかさなる苦惱にむかつて跪ひざまずき祈いのる女がいた。

「一度わたしは鏡でわたしの顔を見せてもらつた。あれはもうわたしではなかつた。わたしではない顔のわたしがそんなにもう怖こわくはなかつた。怖いということまでもうわたしからは無くなつていようだ。わたしが滅めつびてゆく。わたしの糜爛びらんした乳房や右の肘ひじが、この連続する痛みが、痛みばかりが、今はわたしなのだろうか。

あのとときサツと光が突然わたしの顔を斬りつけた。あつと声をあげたとき、たしかわたしの右手はわたしの顔を庇おうとしていた。顔と手を同時に一つの速度が滑り抜けた。あつと思いなながらわたしはよろめいた。倒れてはいないのがわかった。なにかが走り抜けたあとの速さだけがわたしの耳もとで唸る。わたしの眼は、わたしが眼をあげたとき、濛々としてゐるものが静まって、崩れ落ちたものがしーんとしていた。どこかで無数の小さな喚きが伝わってくる。風のようなものは通りすぎていたのに、風のようなもの唸りがまだ迫ってくる。あのととき、すべてはもう終つてゐるのだ。なのに、これから何か始りそうで、そわそわしたものがわたしのなかで揺れうごいた。……」

「火の唇」の書きだしを彼はノートに誌してしたが、惨劇のなかに死んでゆくこの女性は一たい誰なのか、はつきりしなかつた。が、独白の囁きは絶えず聞えた。永遠の相に視入りながら、死の近づくにつれて、心の内側に澄み亘つてくる無限の展望。……突如、生の歓喜が、それは電撃の如くこの女を襲い、疾風よりも烈しくこの女を揺さぶる。まさに、その音楽はこの女を打砕こうとする。ああ、一人の女の胸に、これほどの喜びが、これほどの喜びが許されていていいので御座いますようか、と、その女は感動してゐる自分に感涙しながら跪く。と、時は永遠に停止し、それからまたゆるやかに流れだす。

こんな情景を追いながらも、彼は絶えず生活に追詰められていた。それから長く休刊だった雑誌が運転しだすと急に^{きぜわ}気忙しさが加わった。雑誌社は何時^{いつ}出かけて行っても、来訪者が詰めかけていたし、原稿は机上に山積していた。いろんな人間に面会したり、雑多な仕事を片づけてゆくことに何か興奮の波があつた。その波が高まると、よく彼は「人間が人間を揉^もみ苦茶^{くちや}にする」と悲鳴をあげた。

（人間が人間を……。昔、僕は人間全体に対して、まるで処女のように^{おのの}戦っていた。人間の顔つき、人間の言葉・身振・声、それが直接僕の心臓を収縮させ、僕の視野を歪めてふるえさせた。一人でも人間が僕の目の前にいたとする、と忽ち何万ボルトの電流が僕のなかに流れ、神経の火花は顔面に散つた。僕は人間が滅茶苦茶に^{こわ}怕かつたのだ。いつでもすぐに逃げだしたくなるのだった。しかも、そんなに戦き^{おび}脅えながら、僕はどのように熱烈に人間を恋し理解したく思っていたことか）

ところが今では、今でも僕が人生に^{おい}於てぎこちないことは以前とかわりないが、それでも、人間と会うとき前とは違う型が出来上ってしまった。僕が誰かと面談しようとする。僕は僕のなかにスイッチを入れる。すると、さつと軽い電流が僕に流れ、するとあとともう会話も態度も殆どオートマチックに流れだすのだ。これはどうしたことなのだ？ 僕は

相手を理解し、相手は今僕を知っていてくれるのだろうか——そういう反省をする暇もなく、僕の前にいる相手は入替り時間は流れ去る。そして深夜、僕にはいろんな人間のぼらの顔や声や身振がごつちやになつて朧な暈おぼろのように僕のなかで揺れ返る。僕はその暈かきのなかにぼんやり睡りねむ込んでしまひそうだ。と突然、戦せん慄りつが僕の背筋を突走る。

「いけない、いけない、あの向うを射抜け」

何万ボルトの電流が叫びとなつて僕のなかを疾駆するのだ。

（人間が人間を……。その少女にとつて、まるで人間一個の生存は恐怖の連続と苦悶くもんの連続に他ほかならなかつた。すべてが奇異に纏もつれ、すべてが極限まで彼女を追詰めてくる。食事を摂とることも、睡ることも、息をすることまで、何もかも困難になる。この幼い切ない魂いたすは徒いたすらに反転しながら泣号する。「生きていること、生きていることが、こんなに、こんなに辛い」と……。ところが、ある時、この少女の額に何か爽さわやかなものが訪れる。それから向側にほつかりと新しい空間が見えてくる）

「火の唇」のイメージは播らぎながら彼のなかに見え隠れしていた。そのうち仕事の関係で彼は盛場裏の酒場や露次奥の喫茶店に足を踏み入れることが急に増ふえて来た。すると、アルコールが、それは彼にとつて戦後はじめてと云つていいのだったが、彼の眼や脳髓に

沁みてゆき、夜の狭い裏通りには膨れ上ってゆらぐ空間が流れた。……彼の腰掛けている椅子のすぐ後を奇妙な身なりの少年や青年がざわざわと揺れて動く。屋台では若い女が一つのアクセントのように絶えず身動きしながら、揺れているものに取まかれています。眼はニスを塗ったようにピカピカし、ルージユで濡れた唇は血のようだ。あれが女の眼であり、唇かと僕はおもう。揺れているガス体は今にも何かパツと発火しそうだ。だが、僕の靴底を奇妙に冷たいものが流れる。どうにもならぬ冷たいものが……。あの女も恐らく炎々と燃える焰に頬を射られ、跣で地べたを走り廻ったのか。今も何かを避けようとしたり、何かに喰らいつこうとするリズムが、それも揺れている。めらめらと揺れている。それにしても、僕の靴底を流れてゆく冷たいものは……。ふと、彼の腰掛のすぐ後に、ふらふらの学生が近寄ってくる。自分の上衣のポケットからコップを取出し、それに酒を注いでもらっている。

「いいなあ、いいなあ、人間が信じられたらなあ」とその学生は甘ったれた表情でよろよろしている。冷たいものはざわざわとゆれる。火が、火が、火が、だが、火はもうここにはなさそうだ。火事場の跡のここは水溜りなのか。

水溜りを踏越えたかと思うと、彼の友人が四つ角のもの蔭で「夜の女」と立話している。

それからその女は黙って二人の後をついて来る。薄暗い喫茶店の隅すみに入る。(どうして、そんな「夜の女」などになったのです)親切な友人は女に話しかけてみる。(家があんまり……家では暮らせないので飛出しました)小さないじけた鼻頭が、ひっぱたけ、何なりとひっぱたけと、そのように、そのように、歪ゆがんだように彼の目にうつる。それからテールの下にある女の足が、その足に穿はいている佻わびしい下駄が、ふと彼の眼に触れる。あ、下駄、下駄、下駄……冷たいものの流れが……(じゃあお茶だけで失敬するよ)親切な友人は喫茶店の外で女と別れる。おとなしい女だ。そのまま女は領うなずいて別れる。

それからまた、ある日は、この親切な友人が彼を露次の奥の喫茶店へ連れて行く。と、テールというテールが人間と人間の声で沸騰している。濛々と渦巻く煙草の煙のなかから、声が、顔が、わざとらしいものがねちこいものが、どうにもならないものが、聞え、見え、閃くなかを、腫はれぼつたい頬のガラガラした眼の少女がお茶を運んでいる。(ここでも、人間が人間を……。だが、人間が人間と理解し合うには、ここでは二十種類位の符ふ牒ちようでこと足りる。たとえば、

清潔 立派 抵抗 ひねる 支える 崩れる ハツタリ ずれ カバア フイクシヨン
etc,

そんな言葉の仕組だけで、お互がお互を刺戟しげきし、お互に感激し、そして人間は人間の觀念を確かめ合い、人間は人間の觀念を生産してゆく。だが、僕の靴底を流れるこの冷たい流れ、これは一たい何なのだ。……ふと気がつく、向うのテーブルでさつきまで議論に熱狂していた連中の姿も今はない。夜更よふけが急に籐椅子とういすの上に滑り墮おちている。隣の椅子で親切な友人はギラギラした眼の少女と話しあっている。（お腹なかがすいたな、何か食べに行かないか）友人は少女を誘う。（ええ、わたしとても貧乏なのよ）少女は二人の後に歩いて夜更の街を歩く。冷たい雨がぽちぽち降ってくる。彼の靴底はすぐ雨が沁しみて、靴下まで濡れてゆく。灯をつけた食べもの屋はもう何処にもなさそうだ。（君もそんな靴はいていて、雨が沁みるだろう）彼はふと少女に訊ねてみる。（ええ 沁みるわ とても）少女はまるでうれしげに肯うなずく。灯をつけた食べもの屋はもう何処にもない。（わたし帰るわ）少女は冷たい水溜りのなかに靴を突込んで立留る。

「火の唇」はいつまでたつても容易よかどに拗ひらなかつた。そして彼がそれをまだ書き上げないうちに、その淋しげな女とも別れなければならぬ日がやって来たのだ。その後もその女とは裏通りなどでパツタリ行逢つていた。一緒に歩く時間も長くなつたし、一緒に喫茶店に

入ることもあった。人生のこと、恋愛のこと、お天気のこと、文学のこと、女は何でもと
り混ぜて喋り、それから凝じつと遠方を眺ながめる顔つきをする。絶えず何かに気を配っているところ
と、底抜けの夢みがちなところがあつて、それが彼にとつては一つの謎なぞのようだった。
お天気のこと、恋愛のこと、文学のこと、彼は女の喋る言葉に聴きき惚ほれることもあつたが、
何かがパツタリ滑り墮ちるような氣もした。

ああして、女がこの世に一人存在していること、それは一たい何なのだ……その謎が次第に彼を圧迫し脅迫するようになっていた。それから、ある日、何故なぜか分らないが、女の顔がこの世のなかで苦しむものの最後のもののように、ひどく疼うずんでいるように彼にはおもえた。

「あなたのほんとうの氣持を、それを少しきかせて下さい」彼は突然口走った。

「もう少し歩いて行きましょう」と女は濠ほり端ばたに添う道の方へ彼を誘った。水の面や、夕暮の靄もやや、枯木の姿が何かパセチックな予感のようにおもえた。女は黙もくつて慍おこつたような顔つきで歩いている。何かを払いのけようとする、その表情が何に堪たえきれないのかと、彼はぼんやり従したがって歩いた。突然、女はビリビリと声を震わせた。

「別れなければならぬ日がありました。明日、明日もう一度ここでこの時刻にお逢い致

しましよう」

そう云い捨てて、向側の鋪道ほしうへ走り去った。突然、それは彼にとって、あまりに突然だったのだが……。

女は翌日、約束の時刻に、その場所に姿を現していた。昨日と変って、女は静かに落ち着いた顔つきだった。が、その顔には何か滑り墮ちるような冷やかなものと、底抜けの夢のようなものが絡みからあつている。

「遠いところから、遠いところから、わたしの愛人が戻って参りました」

遠いところから、遠いところから、という声が彼には夢のなかの歌声のようにおもえた。

「そうか、あなたには愛人があつたのか」

「いいえ、いいえ、愛人があつたところで、生きていることの切なさ、堪えきれなさは同じことで御座います」

生きていることの切なさ、淋しき、堪えきれなさ、それも彼には遠いところから聴く歌声のようにおもえた。

「それではあなたはどうして僕に興味を持ったんです」

「それはあなたが淋しそうだったから、とても堪えきれない位、淋しそうな方だったから」

そう云いながら、女は手袋を外して、手を彼の方へ差出した。

「生きていて下さい、生きていて下さい」

彼が右の手を軽く握ったとき、女は祈るように囁いていた。

(昭和二十四年五、六月合併号『個性』)

青空文庫情報

底本：「夏の花・心願の国」新潮文庫、新潮社

1973（昭和48）年7月30日発行

入力：tatsuki

校正：kazuishi

2002年1月1日公開

2006年2月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

火の唇

原民喜

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>